

## 青年部長等研修会（主張発表大会）概況

定刻となり、司会者、県青連浅野副会長は開会を宣し、県青連宮崎会長及び県連渡部専務理事が挨拶をした。

その後、司会者の朗読により「商工会青年部宣言」と「誓いの言葉」を斉唱し、開会終了後の午後1時50分から青年部主張発表大会が開催された。

株式会社新潟日報社三条総局原総局長が審査委員長となり、新潟県産業労働観光部産業政策課水沢参事、県連合会渡部専務理事、県青連後藤相談役、雪組織指導課長の5人により審査が行われた。

<発表順とテーマは別紙のとおり>

各発表者とも、聴衆に訴えかける見事な発表であった。内容も、青年部員にとって今後の活動のヒントとなる興味深いものばかりであった。

審査委員による審査の間、16時00分から、「今後の中小企業施策と青年部活動について」と題し、全国商工会連合会 商工会組織強化推進本部 本部長 大高 衛氏による研修会を行った。内容は以下のとおり。

大高氏は地元千葉県にて家業の醤油製造業を営み、平成15年に代表取締役5代目に就任。商工会青年部より先に、小学校の先輩の誘いで地元の消防団に入団。青年部には、消防団の先輩が商工会青年部の部長に就任する際に誘われ、当時28歳で青年部に入部した。

今後の中小企業施策として、自身の体験を通じてマーケティング（アンケート調査）の重要性を述べられた。大高氏が商工会に入った当時、自社の醤油を業務用として、居酒屋のチェーン店や料理屋に直接販売していた。業務用の世界では、できるだけ安く売ることが当たり前で、中小零細企業は、いかに大手と同じ値段で安く抑えて売れるか、そのために、嵩（かさ）を多くするしかなかった。18リットルの醤油をアルミ缶で卸していた折、1リットルで醤油を卸せないかと要望があり、安いペットボトルを探し、1リットルの醤油を製造・販売して大成功する。

この成功体験は、女性の就業者が増加する流れの中で、18リットルの

アルミ缶ではなく、女性でも持ちやすい1リットルペットボトルの需要を捉えた、マーケティング力であったと述べられた。

その後、青年部活動で部員を勧誘する際の正しい言葉は、「経営のノウハウがある」、「商工会に入れば経営が上向く」。また、商工会の活用として、大きく3つの事業を覚えておいてほしいと述べられた。

1つ目は、国内で地域の良さを知ってもらう「全国展開支援事業」。

2つ目は、日本の良いものを海外にむけてアピールする「JAPANブランド事業」。海外での日本製品の成功例として、広島県熊野の習字の筆が、シャネルの化粧筆として世界中から愛されていることを語った。

3つ目は、農業・商業・工業、ルートが全く違う異業種が組むことで、市場拡大などのメリットを目的とする「農商工連携」。

最後に、何かをやるかやらないか悩むなら、100%行動したほうが良くて、失敗が成功につながっていく。また、新潟県出身、元首相田中角栄氏を例に、新潟県人はポテンシャル（可能性・潜在能力）があると述べ、どんな人でも青年部に加入させ、40歳で退会するまでに、しっかりした地域人、商人として旅立たせてほしいと激励され講演を終えた。

研修会終了後の17時30分より、表彰式が行なわれた。

はじめに、審査委員長の新潟日報社三条総局 原総局長から、それぞれ発表者ごとの講評があり、その後、成績発表並びに、最優秀賞は県産業政策課水沢参事、優秀賞は県連渡部専務理事、優良賞は県青連宮崎会長からそれぞれ表彰状の授与を行った。（18時00）

表彰結果並びに講評内容は以下のとおり。

最優秀賞（県知事表彰）	能生商工会青年部	齋藤 浩
優秀賞（県連会長表彰）	中郷商工会青年部	宮尾 雅人
優良賞（県青連会長表彰）	荒川商工会青年部	磯部 孝行
	分水商工会青年部	川崎 吉洋

・新潟西商工会青年部 堀井 賢司

「感情をこめて話していた。」

・津南町商工会青年部 山田 孝

「活動をよく見直されていて、青年部の良さが伝わってきた。」

・能生商工会青年部 齋藤 浩

「非常に元気があり、イベントに対する熱い思いが伝わってきた。また、努力のあとがみえた。」

・見附商工会青年部 依田 志郎

「話し方に歯切れがあった。しかし、原稿から少しはなれていた。」

・分水商工会青年部 川崎 吉洋

「方言のスタートが印象的。話し全体がまとまりとして、よく伝わってきた。」

・中条町商工会青年部 緒形 剛

「自分の言葉でしっかり話されていた。」

・小出商工会青年部 山本 和志

「若干、事業報告のようだったが、婚活の内容がよく伝わってきた。」

・中郷商工会青年部 宮尾 雅人

「笑顔が印象的。」

・畑野商工会青年部 山下 峰生

「青年部活動の理想、建設的な意見だった。」

・荒川商工会青年部 磯部 孝行

「町を元気にしたい気持ちが伝わってきた。」

19時00分から、県青連田中副会長の進行のもと懇親会が開催され、今回は、参加者の交流を目的に、くじ引きによる席決めを行った。

最後に県青連伊藤副会長の締めの挨拶により1日目が終了した。

( 2 1 : 0 0 )

7月13日（水）

定刻となり、県青連佐々木副会長の進行のもと、宮崎会長の開会挨拶、その後、研修会に入った。内容は以下のとおり。

研修会第1部 「『自立』と『自律』～答えは常に自分の中にある～」

講師 全国商工会青年部連合会  
相談役 宮本 周司 氏

講師の自己紹介・自身の事業説明からはじまり、県青連の2本の柱として、経営者・後継者としての資質を高めていく、地域を元気にしていく活動があることを述べられた。その後、商工会組織の利活用、自分を変える心構えと捉え方について講演された。

まず、参加者に対して今行っている事業の創業者であるかを尋ねた。そして、何のために青年部に所属しているのか？商工会に対して何が欲しいのか、何を希望するのか？自社の強みをアピールしているか？すべて自分事として捉えなければならないと強調した。

また、失敗の先に成功があり、「明日からやる」という考えは駄目。明日があると考えていたら、いつになっても明日は来ない。しかし、やる以上は成功させよう。そのために、弱みを最小限に抑える努力、強みを最大限に発揮するための努力が必要。最初から努力しないで聞くことは身にならない。まずは、自分事として捉え、調べて商工会の機能を上手に活用してほしいと述べられた。

最後に、どんな形でも、青年部長・副部長に選ばれたのだから、自分事であり、自己責任。いやいやではなく、自らすすんで活動してほしい。この気持ちの違いだけで全然変わる。自分自身で立ち、自分を律して、率先垂範（自分がすすんで手本を示す）、背中でものを語れるようにやっていくことが、他者を動かす行動に変わっていくと激励し、講演を終えた。

## 研修会第2部 「商工会の機能について」

講師 新潟県商工会連合会  
組織指導課長 雪 薫

新潟県内佐渡の少し上にある、栗島浦村は商工会・会議所未設置であることを例に、商工会は、国がつくっているのではなく、商工業を営む地元住民が自らの意思で、国に認可を求め、申請し設立していることを述べ、講演を始めた。

商工会地域・商工会議所地域の特徴として、商工会議所地域は、平成11年から政府主導で行われた市町村合併(平成の大合併)前の市に該当し、都市機能が備わっている地域である。一方、商工会地域は、ほとんどが合併前の町村に該当し、少子高齢化・過疎化・人口減少率が高い地域である。

行政合併前は、役場を中心にまわっていた。行政合併後は、役所本庁がある商工会地域では、経営革新の要望が多く、支所がある商工会地域では、地域の活力が欲しいという要望が多く、商工会ごとに求められるニーズが異なる。

また、商工会は、行政、地域、各種団体との連携をとり、全国商工会連合会等とのネットワークによって保有する情報力は高い。また国(経済産業省)も、商工会の良い特徴として、各地域をいろいろな形で回って情報を把握する、巡回機能に優れているという点を評価している。

この商工会の強みを、受け身ではなく積極的に活用してほしいと述べられ、その例として、農商工連携事業で昨年、日本全国ご当地おやつランキングでグランプリを受賞した弥彦村、分水堂菓子舗の「パンダ焼き弥彦むすめ(枝豆)餡」の成功を紹介し講義を終えた。

研修会終了後、田中県青連副会長から閉会挨拶があり、2日間の研修を終了した。

( 1 1 : 0 0 )